

中日茶文化交流の一考察

辺 冬梅
瀬尾 邦雄

一. はじめに

茶を広東語でChaと発音し、福建音では「a」としているが、世界中で茶についての発音は此の二通りだけであろう。日本では福建音を継承し、今日に至っているが茶の日中交流は言語・風習の継承のみならず、出版文化、ひいては精神文化の交流発展にまで至っている。こうした点については中日の大家や諸先学が御論攷済みであるが、本稿では諸先学が未だ充分御論攷されていないと思われる歴史的部分や清談部分に視座を当て乍ら論じてみたいと思っている。

一二. 中国飲茶の歴史

一九九二年五月に出版された『中国茶経』¹⁾では飲茶の歴史を「發乎神農、聞之魯周公、興於唐朝、盛在宋代」と四期に区切ったが、この区分の仕方は正鵠を得ている。中国茶の歴史からみると、茶は当初飲茶に用いられものではなかつ

た。現存最古の本草本で南北朝時代に著わされた『神農本草經』には、人間が中毒を起こした時、茶を解毒剤に使ったことが見える。神話と人間世界が混在する話であり厳たる確証はないが、茶の起源が薬用であったという点に注目すべきであろう。

飲茶の歴史は周代・秦代に始まり上層階級から次第に庶民に広まったといわれる。また、顧炎武の『日知録』にはその起源を戦国期とする記載があり、今日、飲茶の起源を特定することは困難である。しかし、同書に「自秦人取蜀後、始有茗飲之事」とある事から飲茶開始の時代こそ特定できないが、蜀漢期にその風習が始まったことだけは分かる。また、漢の宣武帝時代の王褒が著した『僮約』にも茶道具の記載があり、飲茶の風習がかなり盛んであった事を窺わせる。

陸羽は『茶経』で煎茶を編み出したが、それは、従来は煮立て法・泡立て法であったものを茶本来の味が残るように考案したものである。そのため茶に対する九つの提言をした。則ち一・製法、二・分別法、三・器、四・火、五・水、六・炒り方、七・末の方法、八・煮立て方、九・飲み方である。また、この時代、既に茶会が存在していたことが分かる。捨て子であつた陸羽の養父智積禪師が、陸羽に茶会でお茶を点てさせた事実があるからである。更に、八世紀末、唐の徳宗時代、奚陟が二十余人の客と共に茶会を開いた記録も見える。茶会の座を東西二列とし、主人は東側上座に座つた。茶碗は二つ使用したが、茶碗は西側から廻し始める風習で、談笑しながらの飲茶であつたため奚陟にはなかなか茶碗が廻つてこなかつた。そのため、喉の渴いた奚陟は家来に向つて癩癪を起こしたとの記載が見える。

宋代には点茶という表記が見える。蔡襄が仁宗に呈上した『茶録』がその最初のものである。『茶録』は上下二篇、上篇「論茶」は色、香、味から点茶を、下篇「論茶器」は茶器について論じたものである。「点茶」の項では湯加減、湯の注ぎ方、湯量について詳しく論じ、最後に最良の点じ方とは湯と茶とがよく融合すべき状態の事であるとしている。「茶盞」の項では茶の色は白よりは黒盞がよく、青白盞は閩茶家は使用しないとしている。しかし、宋代には白茶が尊ばれ茶碗との色彩調和が勘案され、美観が追究された。徽宗皇帝撰といわれる『大觀茶論』には団茶、焙茶の保存法が述べ

られている。宋代元豐年間の茶の貴重性は茶百斤に対して馬一頭との交換比率からも窺える。その後、馬の分類を九種類に分け、名馬か否かにより茶の量の増減が図られたが、以前として茶の貴重性は失われなかった。

明代には煎茶が行われたことが許次紆の『茶疏』に現れている。この頃は清談流行のころであり、気心知れた友人同士の間では水を汲み湯を沸かして茶をいれるべきであり、慌ただしく賓客を迎える場合は酒を酌み交わすだけでよく、また、ただの友人なら普通の茶でよいとした。宋代に流行した点茶の図集に趙子昂の『茶くらべ』や『琴棋書画図』等があり、茶器については南宋末の審安老人の『茶具図贊』や元代の『図繪寶鑑』があり飲茶盛行の程が窺える。

茶木については二千年程前に栽培が始まり、三世紀には雲南省・四川省へ、五世紀には南方から北方へ、七世紀にはチベットまで普及した様である。更に、飲茶は八世紀には高雅な娯楽の一つとして、詩歌の領域にまで登場した。特に、唐代が最も盛んであり冠婚葬祭、交際の場合等では欠かせないものになった。

三. 日本飲茶の歴史

日本においても飲茶及び飲茶の文献に対する関心が高くなり、茶道の完成と共に江戸期の今堀太一郎が『茶経』の注釈本『茶経詳説』を著した。太一郎の注釈本は日本の文献翻訳力が高い水準に達していた事の証明である。

日本の飲茶の歴史は『茶経詳説』に「本朝聖武帝天平元年、召百人僧於内裡、而被講般若、第二日、有行茶之儀」とあるが、これは天平元年(七二九)に聖武天皇が宮中に僧侶百人を招き、大般若経を誦しさせた後に文武百官に茶を賜ったという事である。天平勝宝元年(七四九)には孝謙天皇が東大寺に五千人の僧侶を集め、盧遮那仏の前で読経をさせ、その労を労うために茶を賜ったとある。その時の茶は中国からの輸入品であった。宝龜年間(七七〇～七八二)、西明寺

の永忠は中国滞在三十年に及んだが、六十三歳の帰国の折り、茶木を持ち帰り叡山麓の坂本に植えた。大同元年（八〇六）六月、永忠は上書し朝廷内での飲茶を勧めた。『日本後紀』に弘仁六年（八一五）四月二十二日、琵琶湖畔の梵釈寺にて嵯峨天皇に点茶を進上した。天皇は二ヶ月後に、近江、播磨などの地に茶木を植えることを命じ、その後收穫された茶葉は天皇に献上された。永忠と同じ頃入唐した最澄、空海も日本への飲茶普及に貢献した。最澄は延暦二十四年（八〇五）天台山国清寺から茶の種を持ち帰り日本で栽培した。しかし、飲茶の風習は留学僧達や宮廷、貴族の間に普及したのみで庶民には伝わらなかった。しかも、寛平六年（八九四）、遣唐使が廃止になり飲茶の風習は自然に消滅した。平安期に至り大雲寺成尋は宋孫忠の船で弟子七人と共に入宋した。延久四年（一〇七二）五月十三日天台山国清寺にて天台智顗に会い、五日後天台山華頂峰に登り茶木の繁茂するのに感動し、至る処で茶の接待を受けたとされる。神宗は成尋に謁見し成尋の希望する茶を贈ったが、寛治五年（一〇九一）、成尋は開封の開宝寺で客死。しかし同行した弟子七人が飲茶の風習を日本に持ち帰った。

『異制庭訓往来』に「我朝名山者以梅尾為第一也、仁和寺、醍醐、宇治、葉室、般若寺、神尾寺、是為補佐此外大和室尾、伊賀八島、駿河清見、武蔵河越茶、皆是天下所皆言也」とあり、鎌倉初期の華嚴僧明恵が栄西から茶の実を贈られ、それを梅尾に植えた処、成功を収め次第に全国に波及していったことが判る。

鎌倉期の臨済僧南浦紹明は正元元年（一二五九）に入宋し、径山寺で径山茶宴、闘茶等の習慣を身につけ文永四年（一二六七）帰国した。同僧栄西は、二度の入宋で茶の種を持ち帰り山城梅尾山に植えた。その著『喫茶養生記』二巻では「茶は養生の仙薬なり、延命の妙術なり、山谷これを生ずれば、その地神靈なり、人これを探るやその人長命なり、天竺も唐国もこれを重んじる古今特有の仙薬なり」とある。栄西の茶栽培により平安期に衰退した飲茶の風習が室町期には復活し、庶民にまで普及した。東大寺蔵『二十口方評定引付』には応永十年（一四〇三）、東大寺南口に一服一文銭の茶店が出店、永享五年（一四三三）には堺の外に多くの茶店が並んだとの記載が見える。そして栄西は茶道の教義も確立

した。その後、栄西の教義は村田珠光、武野紹鷗等により継承発展され、戦国期には千利休が書院茶道を庶民に普及し草庵茶道を確立してから、茶道文化へと発展していった。

四．心重視の飲茶

中国での客に茶を供する風習は、老子の高弟関尹が函谷関で老いた哲人に一碗の黄金の霊薬を捧げた事に始まるとされている。飲茶の風習が道教で特に多く行われてきたのもこの様な遠因に依るものであろう。南方の禅宗では道教の儀式を詳細に組織立て飲茶の風習を確立した。そして達磨像の前で飲茶を行うことを事とした。南宋以後、儒学が盛行し儒学の儀式が飲茶の風習に影響を与えた。この様に中国茶の風習は仏教や道教のみならず儒教の思想が色濃く混在しているのである。しかし、中国茶が三教混在であるのに対し、日本の茶は中国禅のみの影響が色濃く出ている。栄西が入宋し蒙を散し睡を払い道行の助けをなすとして、禅修行のために使ったのが茶であった。更に、飲茶は栄西の臨済禅ばかりでなく、曹洞禅も茶礼として飲茶を重要視してきた。『山上宗二記』にも「惣て茶湯風体は禅なり」「茶湯は禅宗より出たるに依て僧の行を専にするなり、珠光紹鷗皆禅なり」とある様に、代々の茶の名匠が禅師に参叩し、心为一体の厳しい修行に励んだ事が窺える。

足利義政の代、奈良の人村田珠光は茶の心を「清礼和」と表し、曾弟子の利休は「和敬清寂」とした。二人の主張は概ね以下の様に解釈する事が出来る。「和」とは礼これを用うるを貴しなすと同意の調和の和であり、人間や自然の中にあつて万物に調和していく事こそ最も貴い所作であるし、「敬」は謙譲の意であり、「和」と「敬」が連結し「和敬」の二語となると平等の意が形成されてくる。「清」は清潔の意で心身両面の高潔さが求められる思想であり、「寂」とは「寂

び」の事であり、悟達の意である。「寂び」は「和」「敬」「寂」の三要素が備わつて初めて達する境地の事である。岡倉天心はこうした先人の思想を「茶はわれわれにとつては、飲み方の形式を理想化する以上のものとなつた。茶は生の術についての一種の宗教である。茶は純潔と洗練を崇拜すること、すなわち、主客が一体となつて、世俗的なものから無上の幸福を生み出そうとする神聖な儀式の口実となつた。」「茶の哲学は普通の意味での単なる審美主義ではない。というのは倫理、宗教と結びついて人間と自然についての、われわれのありとあらゆる見解を表しているからだ（『茶の本』）と解釈した。つまり茶は神聖な世界に至る一種の儀式であり、世俗から神聖な世界への口実であるといふのである。宗教が悟達の世界であるとするならば、茶の世界も「寂び」といふ悟達の世界を経て神聖な世界に至る一種の宗教であるといえるからである。

最後に、珠光・武野紹鷗及び利休の清風について論ずるならば、珠光の飲茶の儀式は禅風であつたが、飲茶の心構えは寧ろ儒教的理念に基づいていたと言えるであらう。それは、飲茶を行う儀式より、茶を学ぶ心構えや心の中に在ると考えたからである。また、若狭の国の人武野紹鷗も飲茶の侘びとは、足らざる事に満足し慎み深く行動する事であると説いた。紹鷗は藤原定家の「見渡せば花も紅葉もなかり浦の古屋の秋の夕暮れ」に痛く感動し、定家の歌と飲茶の風習の共通性を説いているが、飲茶による心の修養を重視する点においては歌道よりも寧ろ珠光の道を継承発展させたものと思える。そして、兩人ともその生活は隠遁を旨としていた。

五. 中国茶書について

中国茶の歴史は四千年といわれている。しかし、飲茶の歴史に比べ文献の歴史は比較的新しい。陸羽の「茶は南方の

嘉木なり」で始まる世界最古の文献『茶経』（全三巻）と雖も出現は唐代、乾元元年（七五八）頃といわれている。本書は異民族が本書との交換条件に千頭の名馬を挙げ、交換を求めたとの記録がある事などから、唐代の重書であった事が分かる。『煎茶水記』は唐、張又新の手によるもので元和九年（八一四）に完成した。元来『水経』と名付けられた様に名水百選に関する説明が主である。しかし、明の王陽脩が『大明水記』で批判して以来、本書の評価は落ちてしまった。『採茶録』は唐代咸通元年（八六〇）頃温庭筠が著したといわれるが北宋時代に論著の大部分を失ってしまった。全国各地の茶葉の味を六種類に分類し、批評したものである。『十六湯品』は唐代光化三年（九〇〇）頃の成立といわれているが詳細は不明である。題名の通り第一品・一湯、第二品・嬰湯、第三品・百寿湯等々、十六種の茶に分類し、湯の焚き方、注ぎ方、茶碗等について述べている。『茶録』（上下二巻）は宋の蔡襄により皇祐三年（一〇五一）に作られたといわれている。本書は『茶経』の不足した箇所を補い、皇帝に献ずる建安茶だけが良茶ではないと異議を唱え、建安茶の再評価を提案した。そして建安茶の再評価の条件として色・香・味の分類を必要とした。本書は明代の茶書に繋がる存在に位置付けられ中国茶書の中では高い評価を得ている。『東溪試茶録』は宋の宋子安に依るもので地理学的観点から茶を採取する時期と方法等とを述べたものである。『品茶要録』は宋の黄儒が纏めたものである。『大觀茶論』はお茶好きであった宋の徽宗皇帝の手によるもので大觀元年（一一一七）に完成した。南宋趙汝励の『北苑別録』は団茶に関する記述に詳しく、蒸す、搾る、磨く、造る、黄色を通す、炙るの六過程を経る事により最高級品の茶が出来るというのである。『茶譜』は明の朱健の著書である。本書は茶葉の選別に力点を置いている。明代の飲茶の変容を受け、詩人でもある許次紓は『茶疏』で煎茶こそ茶本来の色と香りを持っていると強調した。本書の完成は万歴三五年（一五九七）とされている。『茶解』は明代、万歴三十八年（一六〇〇）に完成された書で茶の魅力を白であると説いている。以上、茶文献の歴史は、明代において現在の形式に飲茶が繋がった様に、文献においても明代に完成し、現代の文献へと継承されたと思うのである。

注

- (1) 陳宋懋主編・上海文化出版社
(2) 陸羽の素姓については『陸文学自伝』では「何許の人か知らず」、『新唐書』では「僧あり、これを水兵に得、これを畜ふ」(陸羽伝)等あり詳くは分らない。

参考文献

- 一、日本中国文化摂取史(鄭彭年・杭州大学出版社・一九九九年一月)
- 二、中日文化交流史話(王曉秋・商務印書館・一九九六年十二月)
- 三、利休わび茶の世界(久保田宗也・日本放送協会・平成二年三月)
- 四、茶会と点前(林屋辰三郎・永島福太郎・角川書店・昭和三十九年九月)
- 五、茶の本(岡倉天心・宮川寅雄訳注・講談社・昭和四十六年七月)
- 六、民俗(宮田登・馬興國・大修館書店・一九九八年十一月)
- 七、中国喫茶文化史(布目潮瀨・岩波書店・二〇〇一年三月)